

東日本大震災とその後の子どもたちを

支えている人たちインタビュー

第12回（後編）

だんだんのはじまり

元々、郡山にはプレーパークの活動がなかったんです。なので、郡山でプレーパークを作りたいということ、ちょっとずつ口に出していました。そしたら、仙台から転勤で郡山に来た親子を、西公園プレーパークから紹介してもらえました。郡山にプレーパークを作りたいという話にはなったのですが、その子は転勤で、私は移住で来ていて地元の間人ではないし、ふたりだし、どうしようかなと思っていました。そんな中で、県の冒険ひろば事業の活動をしている方々が郡山に来ている時にふらっと行ったら、私もプレーパーク作りたいたいという子に会ったんです。3人集まったんですよ。その子は、郡山出身、郡山在住で子育て中だったから、嬉しかったです。地元の子が、外あそびとかそういう自由な感じとか、こどもがやってみたいということが大事にされる場所にすごく興味があったって言ってくれたのがよかったです。それから、「3人集まったらあそび場を作れるよ」って誰かの話を聞いたことがあったことも大きかったです。そして、任意団体として発足して、公民館に登録したのは2018年、メンバーで相談して「あそび場づくり隊だんだん」という名前をつけました。2018年頃は、プレーパークと言って受け入れてもらえるんだろうかという気持ちもありました。あとは、覚えてもらいやすい方がいいよねと、「あそび場づくり隊」になりました。それから、段ボールの「だんだん」がいいよね、とくっつけました。「あそび場づくり隊だんだん」なんだけど、「だんだんあそび場作りたい！」という風にも捉えられるので、うまいことつけられたかな、おもしろいなって自分たちで思っています。でも、だんだんっていう名前つけちゃったから、ゆっくり、ゆっくりすぎるんですけどね。最初の活動したのは、2018年の11月です。自分たちの地域でできる手作りのあそび場、自分たちのできる範囲でやっていこうっていうことで、こつこつやっています。今は、同じ場所でやっている活動とあちこちに行く活動を月1回ずつ、助成金をもらっているんで、その中で開催しています。さらに、助成金を取らずに私がやっている紙芝居屋さんがちょっと公園来ちゃったというような活動も合わせると、全部で月3回くらいやっています。たまに冒険遊び場づくり協会の人たちを呼んで、大きな公園で外あそびをしようっていうのを企画したりしています。2019年に大きな公園でやった時は、200人くらい来たんですよ。コロナ後、こないだ（2023年）開催した時は、親子で50～60人来ていました。

外あそびの感じじゃない

2014年に暮らし始めて、会を作ると言い出したのは2017年なので、本当に亀のような歩みです。でも、その間は外あそびっていう感じじゃないなっていう雰囲気を感じてたんだと思います。最初に開催した2018年11月のあそび場を、段ボールあそび場にしたのは、外あそびにきてくれる感覚がしなかったんです。もちろん放射線量を調べたりもして、周りにきいてみると震災があって、外あそびを楽しみたいっていうよりは、室内あそびがメインだよねっていう文化がもうある感じでした。若い親御さんが、わざわざ泥遊びとかするイメージがまったく起きませんでした。それは東京とかでも実はそうだと思いますが、でもやっぱり福島はそれに輪をかけてというか、もうそれはそういう感じでした。段ボールあそび場は、南相馬の時のイメージがつながって、やるんだったら本当に山のようにあるあそび場にしようと思いました。もうすでにダンボールのトンネルが用意されていて、このトンネルをくぐってね、というくらいだとみんな思っていたようですが、来てみたら本当にたくさんの段ボールがあって、まずダイブするところから、というような、そんな段ボールあそび場をしました。プレーパークのような、こどものやってみようということが大事にされて、どちらかという素材があって、工夫とか発想であそびこめるような、そんな場所が作りたいて思っていることを発信するには、室内でも、そういう場になっていけば、精神は発信できると思ったんです。だから、あそび場作り隊だんだんのモットーみたいなものは、「自分の思ったとおりやってみよう！こどもも赤ちゃんも本当は大人も」です。大人も本当はやってみたいって思っているけど、人の目があるからとか、気にしちゃうところがあるので、大人の壁も壊して。大人も楽にならないとそう考えて、だんだんは活動しています。

大切にしたいこと

話が飛びますが、こどもの場所や経験、空間、時間などを奪っちゃったのは全国どこでも一緒と先程話をしました。そう思ったのは、2012年頃に福島の保育士さんの話を聞いた時でした。2011年の夏、外あそびは30分までとして、笛をピーと鳴らして、はいおわり、という感じだったそうです。そしてその年の秋、たき火の唄を唄う季節になった時、それまでは芋掘りをして、たき火をおこして、たき火の唄を唄っていたのに、それができなくて、自分はたき火の唄をどうして教えられるんだろう、と。それはもうすごく衝撃でした。そして、そういう思いで保育しているのは、全国どこでもそうじゃないかとも思ったんです。たき火の経験なく、たき火の唄教えなきゃなんないのか？って振り返らされたというか。また違うところで聞くと、震災後、砂や泥で遊んでいないから、絵本の経験のほうが先になって、砂遊びとか外あそびみたいな絵本を見ても、こどもたちはぼかんとしちゃう。そういった、現場の保育士の人を感じる肌感覚みたいな話を聞いたことも、だんだんの原動力になっているかもしれません。外あそびだったり自然との関わりだったり、こどもの体験の豊かさみたいなものがどんどん狭まってきている。大人が奪っているともいえると思っています。だから、だんだんは、誰もがみんな、休みの日や放課後に自分の好きにしている時間を持っている

るわけでもなく、いろんな経験や豊かにあそべる環境を持っているわけではないと思った時に、ちょっとでも子どもたちの自由な時間を大事にしたいです。だんだんのあそび場の活動は、場所でもあるけど、時間や空間でもあり、自分で発見することってすごい、そこで君は自分の感じたままにあそんでいるだけで素晴らしいんだ！というようなことも伝えている場所なのかなと思います。

外あそびに対する安心感

2019年に初めて、野外であそび場を開催した時は21世紀記念公園麓山の杜というところで開催したのですが、2018年はまだ除染の土が公園内に埋まっていた、その一角は入れません、という状況でした。除染した土は、袋に入れてまずはその敷地内に埋めるんです。住宅でもそうでした。その後、中間貯蔵場所に持って行ってくれる、というシステムだったんですね。公園は割と最初に除染していましたが、2017年、2018年の時点では、21世紀公園の除染土は中間貯蔵施設への移動がまだだったんです。だから移動が終わった2019年にならないと21世紀公園ではできなかった。また、2019年に別の場所、芳賀池公園というところがいいね、ということでそこであそび場をやろうとしたんです。しかし、芳賀池公園は2019年が除染の土の移動の真っ最中だったんです。工事の看板が立っていて、掘り出してトラックにいっぱい積めてという作業をしていました。活動にはそういうことがかなり影響していました。全然気にしてないっていう人も中にはいるけれど、でもやっぱり、実際に一角に埋まっていることを知っている中で外あそびはできなかったです。なので、2018年は、段ボールあそび場をやっていたのです。そして、その後の2019年の21世紀公園での活動、外で開催したあそび場には200人の参加者が来てくれました。でも、それに来た人が、こんなに外であそんでいる風景見たのは久しぶりって言いたかったんだと思うんですが、「郡山じゃないみたいー」って言っていた親子がいるくらいでした。公園であそんでいる光景とか、ちょっとめずらしかったかもしれないです。みんな求めてはいたんだと思います。そして順調に増やしていこうと思ったらコロナ禍に入ってしまった。コロナ禍は外であそぶのはOKという雰囲気はあったけれど、ただし個人個人で、みたいな感じでした。だから今もそんなに集まらないのかもしれないです。そもそも集まらないんじゃないかという気持ちもあり、本当に集まっちゃったらどうしようという気持ちもあり、集めていいのだろうかとか、いろんな思いがありました。実は私は細々でも、やることは大事じゃないかって思ったんですよね。月一回でも毎回来るよ、とか、来月も来るよ、って大事だなんて思っていました。しかし、コロナでメンバーの中で心配っていう声もあったから、強行するのはできないなと思いました。それは、団体名を決めたら次は会則とかを作らなきゃいけないとか、助成金の仕組みはどうなっているのかとか、一生懸命3人で勉強しながらやってきたので、地域でやっていくには、みんなで話し合いながらが大事と思っています。

こどもたちの変化

だんだんの活動で、同じあそび道具でもこのあそび方しかしちやいけないって言われることがなく、そういう使い方もあるんだね、みたいな感じで認められることによって、おもしろいなと思ってくれるのか、月1回なのに常連のような子はうまれています。次の月に朝早くから待っていたり、また来月も来るね～みたいな感じもあります。開催案内のちらしは、開催場所になる公園の近くの学校、2、3校に配っています。スポ少にも入っていないから土日はひまだよとか、親が土日働いていたり、という声を聞いていたので、本人に直接手渡ったほうがいいなと思っています。でもその割には来ないかもしれないですね。暑い日だったっていうのもあるかもしれません。コロナ後ちょっと違ってきたなって感じはします。コロナで室内の密集したところがだめってなって、外あそびが注目されるかと思ったけど、みんなそれぞれ縮小してあそぶ感じにはなっているかもしれません、まだわからないですけどね。でも、その常連のような子が来たっていうのもそうだし、このちらしを見て、自分で行きたいって思って、親に言ってきたって子もいましたね。

時間と空間について

時間と空間、私、このふたつの言葉を本当によく使いますね。時間は、例えばあそび場の開催が10時～15時までとか、何時間やりました、という時間ではなくて、例えばある子がこれを作っていたいってなったら、切れ間がない時間、そんな時間のことを考えています。その子が使いたいと思ったら、使える時間。もちろん永遠ではないんだけど、現代は細切れすぎるかなって思いがあります。例えば、スタンプラリーだと集めるのが目的で、集めたら素敵なことがあるから、大人はよかれと思って、次に行くよって言うかもしれない。でもこどもって最初のスタンプで、あ、こんなところがあった！うわ、楽しい！って思ったら、もう時間のことを考えないですよ。4個スタンプ押さなきゃいけないから12時までに、みたいなことをわかったほうが楽しくなる時もあるかもしれませんけど、15分で歩けば着くところを3時間かかるのは、そこが永遠と思う程おもしろいからだと思います。ただの穴でもこれは何の穴だ、と言っただのぞいて、しばらく経ってもまだのぞいてるというような時間を、大人の事情で細切れのものにしないで与えたいと思っています。そして、私が空間と言う時は、わくわくする楽しい「時間」とこどもの笑い声が聞こえ、地域のおじちゃんおばちゃんが通りかかって結果的に一緒にいられる「場所」のどっちの意味も含めて言っています。

これからのこと

これからの活動については、だんだんのあそび場は活動頻度をあげていければいいなと思っています。でも、あそび場でやりたいこととしては、こどものあそび場を提供するだけじゃなく、大人がこどもの権利や場所、空間とかを奪っちゃうことってあるよねってことに気づくとか、食い止めるというか、そういう仲間を増やしていきたいと強く思っています。知らず知らず狭めていることもあるかもしれないですよ、車社会とか、原発のこと、自

然破壊とかもそうかもしれません。いろんな考えがあるけども、教育とか学校現場とかも、本当にこういう感じでいいのかなと考えたり言ったりする仲間を増やしていきたいです。もちろん、こどもが自由なあそびを経験して行ってほしいっていうのもありますが、大人のまなざしが硬かったら、こどもは…もちろん隙間を見つけてあそびはするけど、社会の目を変える、大人のほうをやわらかくするのも仕事だよなって思います。大人がどんどんせげめていったら、その威力って半端ないと思います。頻度はあげていったほうがいいなとも思いますし、そういった仲間を増やしていきたい、とも思っています。なんにもしないと、広がっていかないですもんね。

◎福島県の渋沢やこさんにお話を伺って

酒井真由子

2023年12月末、渋沢やこさんの語りを文字にした原稿が上がってきました。渋沢さんのお話を伺っての感想を書くにあたり、8月に渋沢さんにお会いしたときのことを思い出してイメージを膨らませていました。そのような中での2024年元旦16時10分、能登半島地震。私が住んでいた地域もかなり揺れたのだから、石川県、富山県、新潟県はどれだけ揺れたことか。北陸地域に思いを巡らせると同時に、渋沢さんはじめ、私たちがこれまでお話をお伺いした方々の語りがとても意味のあるものだと思えて痛感しました。

渋沢さんは、なんと、1995年1月の阪神・淡路大震災でも、2011年3月の東日本大震災でも現地に駆けつけていた、という方です。日本を震撼させた大災害を、こどもの支援者として経験している渋沢さんのお話は具体的であり、どんなテキストよりも説得力のあるものでした。

渋沢さんがおっしゃるように、阪神・淡路大震災直後にはこどものPTSDや心的外傷後ストレス障害、心のケアについては一般的には知られておらず、阪神・淡路大震災後に専門家が注目し、新聞やテレビを通して広まっていったのだと思います。研究分野でも「子どもPTSD」とか「心的外傷後ストレス障害 震災」といったキーワードで論文検索(CiNii)をすると、ヒットするのは1995年以降です。つまり、阪神・淡路大震災では、一般的には子どものケアや子どもの居場所づくりに目が向けられることがなかったにもかかわらず、渋沢さんが所属していた世田谷区のプレーパークでは子どもの遊び支援を行ったのです。これは本当にすごいことだと思いました。

渋沢さんは、1995年の阪神・淡路大震災に対して、2011年の東日本大震災ではこどものケアがあたり前のようになっていたという大きな変化があったと語っております。この大きな変化を肌で感じる事ができたのも、両方の震災を現地で経験した渋沢さんだからでしょう。ちなみに、能登半島地震からおよそ2週間後、こども家庭庁は子どもたちが安心して遊んだり学んだりできるような居場所づくりをするNPO法人などに財政支援を行うと発表しました。渋沢さん含め、子どもの居場所・遊び場づくりをして子どもを守っている

方々の奮闘のおかげだと思います。

ところで、渋沢さんに、東日本大震災の際に、阪神・淡路大震災時のことではあったか尋ねたところ、渋沢さんは少し考えてから、1回1回・一人ひとりが違うのだから、前の経験が次にかされることはあまりないし、マニュアルを作ることなどできない、「1回1回きちんと見ること」だとお話くださいました。私たちは、つい、これまでの経験や先入観から子どもの対応を考えてしまいがちです。けれど、「これまではこうだった」という経験を一旦脇に置いておく。そして、目の前の子どもをじっくり見たり、子どもの活動に巻き込まれたりしてみる。すると目の前の子どもがどうやって生きようとしているのかが見えてくるのではないか。渋沢さんのお話からそのようなことを考えました。そして渋沢さんは、震災時に限らず、現在のライフワークである「なにぬの屋」でも、渋沢さんの家に子どもたちが居るときにも、「あそび場づくり隊だんだん」でも、1回1回、一人ひとりをきちんと見ているのだろうと思いました。

話が少しずれますが、つい先日、私は本学の裏にある山で、子どもやおとなと共に木に関するプロジェクトを行いました。その時、渋沢さんの語りがふと思い浮かび、気づいたことがあります。木のプロジェクトの中で、木々を対象物として見ている大人とは異なり、小学4年生のY児やK児、小学2年生のS児は裏山の木や虫になっている、彼らは今いる山の風景に溶け込んで木々と一体化しているのだ、と思った出来事がありました。ある体験の中で、こどもはその世界に無意識のうちに溶け込み一体化するとしたら、子どもは災害時にも目の前の風景や出来事のなかに溶け込んでしまっているのかもしれない。子どもは、木や自然に対して距離をおいて見るおとなとは異なる体験をしているのかもしれない。渋沢さんが丁寧にお話くださった、震災直後に子どもたちが地震や火事の遊びをしていること、一方で地震の「じ」や津波の「つ」という言葉にも怖がる子どもがいたことを思い浮かべながら、そのようなことを考えていました。

渋沢さんの時間観と空間観には区切りや壁がほとんどありません。渋沢さんの家に子どもたちが上がり込んできているという話、そして何度か出てきた「ごちゃごちゃ」という話。渋沢さんの生き方にも壁がないことに、ただただ感服するばかりです。

最後に、能登半島地震後、子どもの様子や子どもに対する支援などがテレビや新聞で頻繁に報道されております。一方で、きっと、私たちが見えていないところにも子どもが存在している、そのことも想像しておかねばならないと思っております。

能登半島地震により被害に遭われたみなさまへ 心よりお見舞い申し上げます。

聞き手 小林成親、京井麻由

まとめ 酒井真由子

編集 清水冬音